

# 槇ヶ坪3号遺跡(B地区)

1988

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

## 広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第72集

## 横ヶ坪3号遺跡（B地区）

頁・行	誤	正
3・第2回		遺跡名一覧を差し替える
8・9	出土遺物（第11回 図版4）	出土遺物（第11回）
10・9	SK6（第7回 図版6a～b）	SK5（第8回 図版6a～b）
10・10	N40°Eで	N4°Eで
11・6	弥生土器（4・5）	弥生土器（3・5）
11・11	5は体部が	3は体部が
12・4	SK7（第9回 図版7a・b）	SK7（第9回 図版7a）
12・13	出土遺物	出土遺物（第11回）
14・3	石蹴が	石蹴（7）が
16・29	出土遺物（第16回・図版14）	出土遺物（第16回）

## 槇ヶ坪3号遺跡(B地区)



1988

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

## 例　　言

1. 本書は、賀茂学園都市開発整備事業（西高屋地区）に伴う新住宅市街地開発事業（西高屋循環線）に係る槇ヶ坪3号遺跡B地区（東広島市高屋町杵原3150-1）の発掘調査報告書である。
2. 調査は、東広島市から委託を受けて、財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
3. 発掘調査は、財団法人広島県埋蔵文化財調査センターの調査研究員太田史代、井上信一が担当し、遺物の実測・整図及び写真撮影は太田が行った。
4. 本書の執筆は、太田（I・III・IV・V）と井上（II）が分担して行い、太田が編集した。
5. 本書で使用した遺構の表示は次の通りである。

### S K：土壤

6. 挿図と図版の遺物番号は同一である。
7. 第1図は、建設省国土地理院発行の1:25,000の地形図（白市）を使用した。
8. 本書に使用した方位は、全て磁北である。
9. 賀茂学園都市開発整備事業地（西高屋地区）内遺跡群は、調査開始当初は東1～21地点遺跡と仮称していたが、以下の表のように改めることとした。

賀茂学園都市開発整備事業地（西高屋地区）内遺跡名称新旧対照表

旧 遺 跡 名	新 遺 跡 名	旧 遺 跡 名	新 遺 跡 名
東 1 地点遺跡	中郷 1 号遺跡	東 12 地点遺跡	胡麻 5 号遺跡
東 2 地点遺跡	藏田 1 号遺跡	東 13 地点遺跡（A地区）	槇ヶ坪 3 号遺跡（A地区）
東 3 地点遺跡	藏田 2 号遺跡	東 13 地点遺跡（B地区）	槇ヶ坪 3 号遺跡（B地区）
東 4 地点遺跡	胡麻 1 号遺跡	東 14 地点遺跡	槇ヶ坪 4 号遺跡
東 5 地点遺跡	藏田 3 号遺跡	東 15 地点遺跡	中郷 2 号遺跡
東 6 地点遺跡	四ヶ谷 1 号遺跡	東 16 地点遺跡	淨福寺 2 号遺跡
東 7 地点遺跡	胡麻 2 号遺跡	東 17 地点遺跡	淨福寺 2 号遺跡
東 8 地点遺跡	胡麻 3 号遺跡	東 18 地点遺跡	淨福寺 2 号遺跡
東 9 地点遺跡	胡麻 4 号遺跡	東 19 地点遺跡	淨福寺 2 号遺跡
東 10 地点遺跡	槇ヶ坪 1 号遺跡	東 20 地点遺跡	淨福寺 1 号遺跡
東 11 地点遺跡	槇ヶ坪 2 号遺跡	東 21 地点遺跡	淨福寺 2 号遺跡

## 目 次

I.	はじめに	(1)
II.	位置と環境	(2)
III.	調査の概要	(5)
IV.	遺構と遺物	
(1)	弥生時代	(7)
(2)	古墳時代	(13)
(3)	その他の遺構と遺物	(19)
V.	ま と め	(20)

## 図 版 目 次

図版1. a	遠景	図版7. a	SK7
b	近景	b	SK8
2. a	全景	8. a	第1号古墳調査前
b	作業風景	b	同上全景
3. a	SK1	9. a・b	第1号古墳調査後全景
b	SK2土層断面	10. a・b	第1号古墳北側溝内遺物出 土状況
c	同上掘り方	11. a・b・c	第1号古墳南側溝内遺物 出土状況
4. a	SK3	12. a	第1号古墳第1主体部検出状況
b	同上掘り方	b	同上完掘状況
5. a	SK4	13. a	第1号古墳第2主体部土層断面
b	SK5検出状況	b	同上掘り方
c	同上掘り方	14.	出土遺物
6. a	SK6検出状況	c・d	同上遺物出土状況

## 挿 図 目 次

第1図 原の谷遺跡表採遺物実測図(1:2).....	2
第2図 周辺主要遺跡分布図(1:25,000).....	3
第3図 横ヶ坪3号遺跡地形図(1:1,000).....	5
第4図 道構配置図(1:400).....	6
第5図 SK1実測図(1:30).....	7
第6図 SK2実測図(1:30).....	8
第7図 SK3・4・5実測図(1:30).....	9
第8図 SK6実測図(1:30).....	10
第9図 SK7実測図(1:30).....	11
第10図 SK9実測図(1:20).....	12
第11図 SK2(1・2), SK6(3・4), SK7(5)出土遺物実測図(1:3).....	12
第12図 第1号古墳埴丘実測図(1:200).....	13
第13図 第1号古墳埴丘断面図(1:120).....	14
第14図 第1号古墳北側溝遺物出土状況実測図(1:20).....	15
第15図 第1号古墳主体部実測図(1:30).....	17
第16図 第1号古墳出土遺物実測図(1:3, 7は1:2).....	18
第17図 SK8実測図(1:20).....	19
第18図 表土出土遺物実測図(1:3).....	19

## I. はじめに

広島県のほぼ中央に位置する東広島市では、近年山陽自動車道の建設、工業団地の造成、国道の改良等多くの開発が行われている。また広島大学の移転に伴い、賀茂学園都市開発整備事業が進められており、その中に西高屋駅の北側に広がる丘陵一帯の新住宅市街地（東広島ニュータウン）建設及びそれに付帯する幹線道路建設がある。この区域内において昭和 60 年度から仮称東 1～東 21 地点遺跡（東 8・東 14 地点遺跡は保存地区とした。）の発掘調査が行われており、今回調査を行った楓ヶ坪 3 号遺跡 B 地区は、昭和 60 年度に調査された仮称東 13 地点遺跡の南端部分に位置している。

昭和 59 年 10 月、東広島市（都市整備課）は新住宅市街地開発事業（西高屋循環線）地内の遺跡の有無に関し、東広島市教育委員会に協議した。これを受けて東広島市教育委員会は、同年 11 月工事予定地内の踏査を行い、周知の埋蔵文化財包蔵地である楓ヶ坪第 1 号古墳の存在を再確認した。このため東広島市教育委員会は、保存できない場合は事前に発掘調査を行い、記録保存することが必要である旨を指導した。都市整備課では、工事の設計変更等は不可能であるとの判断から、昭和 60 年 12 月、当センターに発掘調査を依頼した。しかし、当センターでは昭和 61 年度分はすでに事業計画を全て決定しており、当該年度の調査実施は困難であることから、協議の結果、昭和 62 年度に実施することになった。

発掘調査は、昭和 62 年 4 月 13 日～5 月 30 日まで行い、5 月 23 日には、東広島市教育委員会と共に遺跡見学会を開催したところ、約 100 名の参加があった。

本報告書は、以上の経過を経て行った発掘調査の成果をまとめたものであり、当地域の埋蔵文化財の研究資料として、またこの地域の歴史の一端を知る手がかりとして広く活用いただければ幸いである。

なお、調査にあたっては広島県教育委員会の指導を得るとともに、東広島市都市整備課、東広島市教育委員会及び地元の方々から多大なる協力をいただいた。記して謝意を表したい。

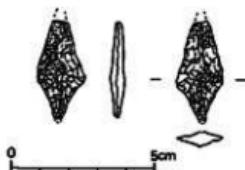
## II. 位置と環境

東広島市は広島市の東部に隣接し、広島県南部のほぼ中央に位置する。市の中心を占める西条盆地は、標高約210m、年平均気温13.7°C、年間降水量約1,550mmで、気候は瀬戸内型と山地内陸型の中間となる。また沼田川、黒瀬川、瀬野川などの河川の上流域となっているため小支流が多い。この小支流が造る沖積地によって盆地内には比較的安定した沖積地が形成されており、穀倉地帯として知られている。

横ヶ坪3号遺跡は西条盆地の東端に位置し、吉備高原に属する世羅神石高原台地の延長面に広がる台地が、浸食によって造られた低丘陵上に存在する。遺跡の西側には杵原川が南方に流れ、沼田川の支流である入野川と合流する。また杵原川の一部は西方に流れ黒瀬川に合流し瀬戸内海に注ぐ。これらの川が形成する沖積地が遺跡の南側に広がり、西条町中心部へと開けている。入野川を挟むように南北に広がる丘陵上には、多くの遺跡が確認されており、この沖積地を中心として生活の基盤が築かれていたと考えられる。

当遺跡周辺の遺跡について概観すると、高屋町内で旧石器・縄文時代の遺跡は未確認ではあるが、本遺跡の同一丘陵（昭和60年度発掘調査地点）の表土層から、縄文時代後期の土器片が出土している。また石器としては、西高屋駅南側の丘陵上に位置する原の谷遺跡近辺で表探したものがある。これは、チャート製の有茎尖頭器で、長さ2.7cm、幅1.2cmである。有茎尖頭器は、東広島市内では志和町内から黒曜石で作られた縄文時代早期のものが表探されている<sup>1)</sup>が、高屋町内のものと比較すると、石材は異なるものの形は非常に良く似ていることから、縄文時代早期か若干新しい時代のものと考えられる。またこの他に西条町の西ガガラ遺跡<sup>2)</sup>から、旧石器時代・縄文時代の住居跡やそれに伴う遺物が出土しており、高屋町内でも今後旧石器～縄文時代の遺跡が確認される可能性は高いものと言えよう。

弥生時代の遺跡で調査されたものでは、当遺跡西隣の丘陵上に位置し、墳墓群・住居跡群等が検出された西本遺跡<sup>3)</sup>、また隣接した丘陵上に位置し、同様に多くの墳墓群・住居跡群などが検出された賀茂学園都市開発整備事業地（西高屋地区）内遺跡群<sup>4)</sup>がある。これらの遺跡は、弥生時代後期を中心としているが、弥生時代中期のものも確認されている。また、弥生時代後期から古墳時代前期の箱形石棺・石蓋土壙墓など計21基を検出した鏡向山石棺群<sup>5)</sup>がある。この他未調査の遺跡では、



第1図 原の谷遺跡表探遺物  
実測図(1:2)



- ◎13. 横ヶ坪 3号道路  
 1~21. 貴生学園都市開発整備事業地内道路群  
 22. 伊達道路群  
 23. 住田古墳群  
 24. 足山古墳群  
 25. 山手古墳群  
 26. 鹿不道跡  
 27. 正原 1号道路  
 28. 正原 2号道路  
 29. 南高子 1号道路  
 30. 南高子 2号道路  
 31. 奥ノ谷古墳  
 32. 原の谷道路  
 33. 股中筋 2号道路  
 34. 中川道路群  
 35. 巴神社既設道路  
 36. 東田道路  
 37. 仙人谷古墳群  
 38. 薩隅山古墳群  
 39. 猿宿古墳群

第2図 周辺主要遺跡分布図 (1:25,000)

南鳴子遺跡群で住居跡状の落込みや遺物包含層が、巴神社裏遺跡では住居跡状の落込みが認められ、また、段中原2号遺跡では崖面に住居跡2基が露出していることなどから、当該期の集落が広く分布していたことが知られる。

古墳時代に関しては、三角縁神獣鏡2・素環頭太刀1等が出土した白鳥古墳が4世紀末頃のものと考えられている。5世紀初頭には女性人骨、珠文鏡1、碧玉製石釧1などが出土した仙人塚第1号古墳がある。また西条盆地中心部に位置する三ツ城古墳<sup>(5)</sup>は全長84mの前方後円墳で、石槨を有する箱形石棺3基を持つ広島県最大の古墳である。この他の前半期の古墳としては、径10m内外の小規模な鍵向山第1・2号古墳、木原向山第1~3号古墳があげられよう。また未調査の古墳では、全長30m前後の前方後円墳である森信第1号古墳、奥の谷古墳がある。これら前半期の古墳が丘陵上に立地しているのに対して、後半期の古墳は山麓傾斜変換線に約30基ほどが知られている。南側の白鳥山付近では、原田岡山古墳群や志村古墳群のほか大谷古墳群が、また北側山麓では山手古墳群、足山古墳群などがある。この他集落関係の遺跡としては古墳時代中期~後期の住居跡を検出した原の谷遺跡<sup>(6)</sup>がある。

奈良時代には、西条盆地に安芸国分寺<sup>(7)</sup>が建立されており、安芸国を中心となっていたことが窺える。古代山陽道は当遺跡の南側を東西に走っていたと言われており、また国分寺跡の周辺には安芸国分尼寺<sup>(8)</sup>が存在していたと思われる。

中世では、この地を治めていた平賀氏に関連する遺構が多く、平賀氏の山城として御園<sup>(9)</sup>宇城跡、白山城跡、頭崎城跡があげられる。

#### 註

- (1) 小都 隆「東広島市志和町阿原出土の有茎尖頭器」「芸術」第2集 昭和50(1975)年
- (2) 広島大学統合移転地埋蔵文化財調査報告委員会「西ガガラ遺跡」昭和62(1987)年
- (3) 広島県教育委員会「西本遺跡群一A・B・C地点一」昭和51(1976)年、  
東広島市教育委員会「西本遺跡群一D・E・F地点一」昭和51(1976)年
- (4) (財) 広島県埋蔵文化財調査センター「賀茂学園都市開発整備事業地(西高星地区)内遺跡群I」「昭和61(1986)年、  
「賀茂学園都市開発整備事業地(西高星地区)内遺跡群II」「昭和62(1987)年
- (5) 広島県教育委員会「賀茂カントリークラブゴルフ場内遺跡群発掘調査報告」昭和50(1975)年
- (6) 広島県教育委員会「三ツ城古墳」「広島県埋蔵文化財調査報告」第1集 昭和29(1954)年
- (7) 東広島市教育委員会「原の谷遺跡発掘調査報告」「埋蔵文化財調査報告書」昭和60(1985)年
- (8) 広島県教育委員会「安芸国分寺跡」第1~第3次 昭和45(1970)~昭和47(1972)年
- (9) 広島県教育委員会「安芸国分尼寺跡—伝承地にかかる—」第1~第3次 昭和53(1978)~昭和55(1980)年

### III. 調査の概要

西高屋駅北側の丘陵は、近年賀茂学園都市開発整備事業に伴い調査が進んでおり、横ヶ坪3号遺跡の存在する丘陵は東13地点遺跡として、昭和60年度に調査が実施されている。今回調査を行ったのはこの南側部分で、昭和60年度調査区をA地区、今年度調査区をB地区とした。A地区からは弥生時代中期末の墳墓、古墳時代前半期の貼り石を有する方墳1基、古墳時代後半期の円墳3基、箱形石棺1基等が確認されている。

横ヶ坪3号遺跡は、横ヶ坪古墳群として3基の古墳の存在が知られており、今回調査を行ったのはこのうちの横ヶ坪第1号古墳と呼ばれていたものである。

B地区は、丘陵の最高所からゆるやかに南に傾斜する斜面に位置する。



第3図 横ヶ坪3号遺跡地形図(1:1,000)

調査は、既に露出していた石棺を基点として、尾根筋を通る線とこれに直交する線で墳丘を4区分した。そして、この基線に沿って試掘溝を設け、この試掘溝の壁を土層観察用畦として調査を行った。また、この基点から南へ10mごと尾根線に直交する土層観察用

の畦を残し、表土の除去を行った。2~3cmのごく薄い表土を除去すると、黄褐色砂質土(花崗岩風化土)が露出し、遺構はこの地山面で検出した。また、調査区南端部の急斜面側の地山土は赤褐色粘質土で、この層からは遺構、遺物とも検出されなかった。

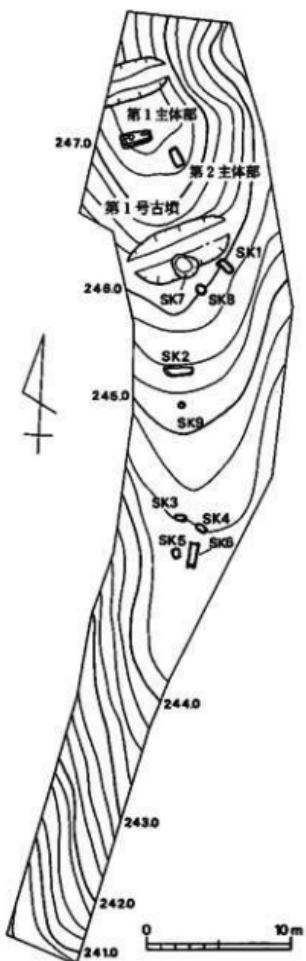
検出した遺構は、古墳1基、弥生時代の墳墓6基、土壙等である。

古墳は調査区北端、丘陵の最高所からやや南へ下るところに位置している。尾根を2本の直線的な溝で切り離すことで墓域を区画しており、墳形は明瞭ではない。主体部は箱形石棺1基と木棺1基で、遺物は北側周溝底面より出土した土師器壺がある。

尾根は緩やかに下りながら標高245.0mで平坦面を形成し、さらに南へと急傾斜で下っていく。弥生時代の墳墓6基のうち4基は、この平坦面で検出した。ここでは墓壙内覆土と地山土(黄褐色土)との判別が困難であったため、地山土を10~15cm掘り下げ遺構を確認した。墓壙は長さ70~80cmの小型のもの3基と大型のもの1基で、小型の墓壙が大型の墓壙を取り囲むように配列している。大型の墓壙SK6の墓標石下から甕形土器や底部穿孔の鉢形土器が出土しており、弥生時代中期後半のものと考えられる。

この他古墳の南側からも弥生時代の墓壙等を検出した。

以上のように今回の調査では、弥生時代中期後半~古墳時代初頭にかけての遺構を確認することができた。



第4図 遺構配置図 (1:400)

## IV. 遺構と遺物

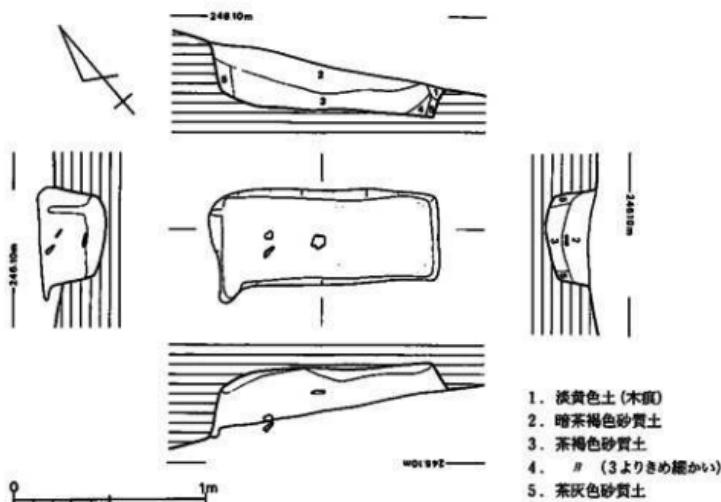
### (1) 弥生時代

弥生時代の遺構は土壙8基を確認した。そのうちSK1～6は墓壙である。SK1・2は調査区のほぼ中央に単独で存在するが、SK3～6は舌状に突き出た尾根の平坦部（標高244.5m）でまとまって検出した。この他にSK7・9があるが、性格は不明である。

#### 墓壙

##### SK1 (第5図、図版3a)

第1号古墳の東南約0.4mに位置する墓壙である。長軸はN50°Eを指す。規模は、長さ1.2m、幅0.51m、深さ0.35mで、平面形は北側小口がやや広がる隅丸長方形である。壁面は約70°の角度で掘り込まれ、底面は北西側がやや高くなっている。北側小口壁には、幅約3cmの側板設置の掘込みが明瞭に残る。また土層観察により、木棺裏込め土（茶灰色砂質土）が確認でき、これから木棺内法は長さ1.0m、幅0.23～0.35mと推定できる。南東側小口が北東側に比べて若干広いことから、頭位は南東側と考えられ、木棺の組み方は頭側を先に固定し、足部で棺の大きさを調節した「匁」形になると思われる。遺物は、上層から弥生土器片が出土した。



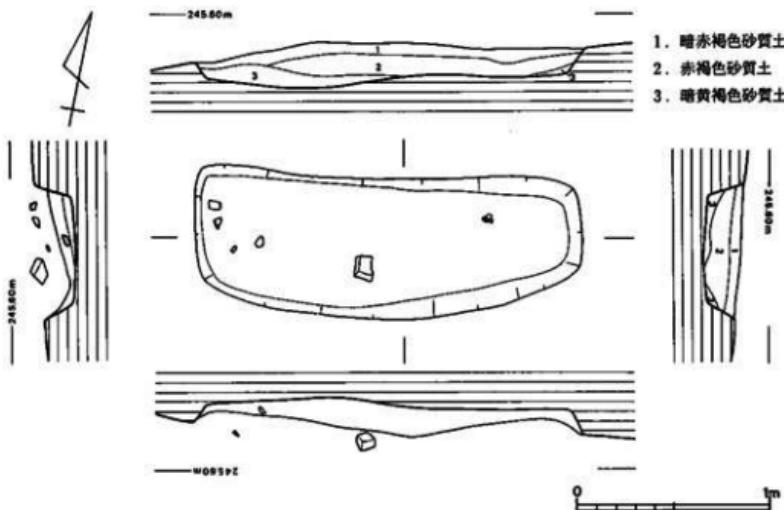
第5図 SK1実測図(1:30)

### SK 2 (第6図、図版3b・c)

第1号古墳の南側約7m、尾根の傾斜がやや緩くなった調査区のほぼ中央に位置する墓壙である。長軸はN79°Eで、尾根主軸に直交する。墓壙掘り方の規模は、長さ2.0m、幅0.35~0.55m、現状での深さ0.2mで西側小口がやや広く、頭位は西側と考えられる。壁面は約60°の角度で掘り込まれ、底面は西側へ傾斜している。墓壙は表土下約15cmで検出した。墓壙内は、暗赤褐色砂質土、赤褐色砂質土、暗黄褐色砂質土の自然堆積がみられ、木棺痕跡は確認できなかった。墓壙中央部、底面から約25cm上面で10cm大の角礫が出土しており、おそらく墓標石と考えられる。遺物は上層から弥生土器片(高杯)が出土した。

### 出土遺物(第11図、図版14)

弥生土器(1・2) 1は体部が浅い椀状の高杯杯部である。復元口径は13.5cmで、体部は直線気味に開く。口縁端部は内傾して上下に拡張し、外面に3条の凹線文を施す。調整は口縁部外面横ナデ、内面は磨滅が著しく不明である。色調は淡黄褐色で、胎土は1mm以下の砂粒を僅かに含む。2は低脚の高杯脚部である。復元脚径は7.3cmで、脚裾部は大きく外反する。脚端部を上方に拡張し、外面に2条の凹線文を施す。また、脚部には三角形の透かし5か所(復元)を施し、脚部下半には3条の凹線文がみられる。内外面とも磨滅が著しく調整は不明である。色調は淡黄褐色で、胎土は1mm以下の砂粒を含む。



第6図 SK 2実測図(1:30)

### SK 3 (第7図、図版4a・b)

SK 2から約10m南側、尾根先端の平坦部に位置する墓壙である。長軸はN 81°Wで、尾根筋とほぼ直交する。墓壙掘り方の規模は、長さ0.8m、幅0.3~0.4m、深さ0.28mで、平面形は隅丸長方形である。壁面はほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。また、墓壙底面からは、長さ40cm、幅25cm、厚さ15cm及び長さ・幅25cm、厚さ12cmの石や拳大の礫等計4個の石が出土した。本来は墓標石として置かれていたものが、木棺の腐朽により転落したものと思われる。墓壙は、東側小口が西側に比べて若干広く掘り込まれており、このことから頭位は東側と推定される。遺物は出土していない。小児用の墓と考えられる。

### SK 4 (第7図、図版5a)

SK 3の東側約0.8mに位置する墓壙である。長軸はN 55°Wを示し、尾根筋にはほぼ直交する。墓壙掘り方の規模は、長さ0.9m、幅0.35~0.4m、深さ0.2mで、平面形は西側がやや広がる隅丸長方形である。壁面は約70°に掘り込まれ、底面はほぼ平坦である。墓壙内覆土は黄灰色土で、木棺痕跡等は確認できなかった。墓壙内覆土と地山の識別が困難で、墓壙は表土下20cmで検出したが、本来は深さ0.35m以上と思われる。遺物は出土していない。規模から小児用の墓壙と考えられる。



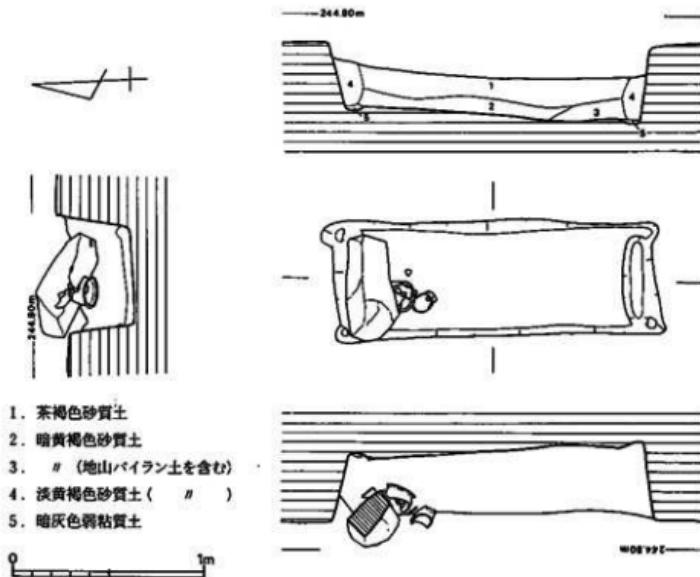
第7図 SK 3・4・5実測図 (1:30)

SK 5 (第7図、図版5b・c)

SK 3・4の南側約1.2mに位置し、SK 6とほぼ並列する墓壙である。長軸はN19°Wで、尾根筋とほぼ平行している。墓壙は表土下20cmで検出した。土層観察のトレンチのため北側は消失しており、墓壙掘り方の長軸は推定であるが、長さ0.7m、幅0.5m、深さ0.25mで、平面形は隅丸長方形と思われる。壁面はほぼ垂直に掘り込まれ、底面は南側に僅かに傾斜する。墓壙内覆土は、淡灰褐色砂質土層と淡茶褐色砂質土層からなり、木棺痕跡は確認できなかった。墓標石と考えられる長さ50cm、幅25cm、厚さ80cmの板状の石が、南小口側で墓壙を覆うように出土した。遺物は出土していない。規模から小児用と考えられる。

SK 6 (第7図、図版6a～d)

SK 4の南側約1mに位置し、SK 5と並列する墓壙である。長軸はN40°Eで尾根筋とほぼ平行している。墓壙掘り方の規模は、長さ1.65m、幅0.62～0.57m、深さ0.35mで、平面形は匁工状である。壁面はほぼ垂直に掘り込まれ、底面は南側に僅かに傾斜する。南北両小口には長さ40～45cm、幅5cmの小口溝が、また壁には幅5～6cmの側板設置の掘込みが残り、木棺の形状は側板が小口板を挟み込んだ形と推定できる。木棺内法は、長さ1.35m、幅0.40～0.45mで、北側小口が南側より若干広いことから頭位は北側と考えられる。

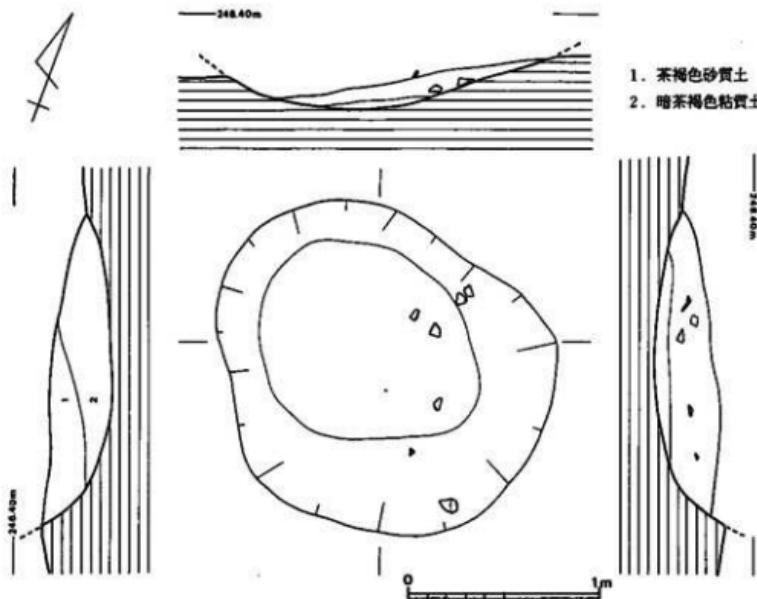


第8図 SK 6 実測図 (1:30)

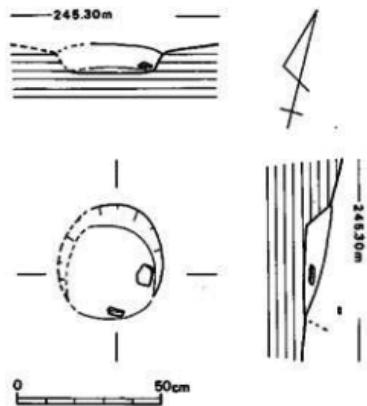
北側小口には基標石と思われる長さ 55 cm、幅 25 cm の石が落ち込んだ状態で出土した。また石と同レベルから弥生土器（鉢）がほぼ完形で、また石の下からは弥生土器（甕）が口縁部を下に、体部下半が破損した状況で出土した。おそらく、木棺の腐朽により基標石が転落したため、本来は鉢と同レベルであった甕が押しつぶされたものと考えられる。

#### 出土遺物（第 11 図、図版 14）

弥生土器（4・5）4 は体部の一部を欠損しているが、ほぼ完形の甕形土器である。口径 14.6 cm、器高 19 cm、底径 4.4 cm である。体部は肩が張らない長胴で、頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部はほぼ水平に外反する。口縁端部を下方に僅かに拡張させ、外面に 1 条の凹線文を施す。体部は倒卵形で、胴部最大径はほぼ中位にある。調整は、体部内外面とも磨滅、剥離が著しいが底部外面にヘラミガキが一部残る。色調は淡黄褐色～赤褐色で、胎土は 1 mm 以下の砂粒を含む。5 は体部がラッパ状に開く底部穿孔の鉢形土器で、復元口径 11 cm、器高 10 cm である。体部は外方にやや内湾しながら立ちあがり、口縁端部は丸くおさめる。底部はあげ底状で、直径約 1.4 cm の焼成後の穿孔がみられる。調整は体部外面はヘラミガキ後、口縁部下に 9 条、くびれ部に 7 条以上の櫛描沈線文を施す。内面は磨滅



第 9 図 SK7 実測図 (1:30)



第10図 SK9実測図(1:20)

が著しく調整不明である。色調は淡黄褐色、胎土は細砂を僅かに含む。

#### 性格不明の土壤

#### SK7(第9図、図版7a・b)

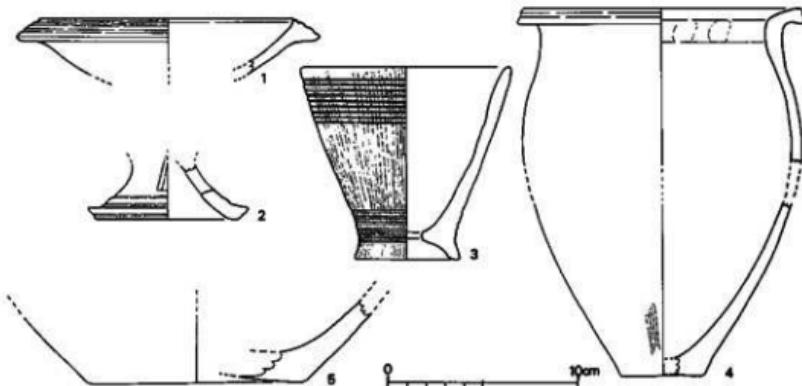
第1号古墳南側溝と重複する土壤である。規模は長軸1.8m、短軸1.7m、現存する深さは0.4mで、平面形はやや不整な円形である。断面形はU字形で、土壤内覆土は、上層が茶褐色砂質土、下層が暗茶褐色粘質土である。本遺構と第1号古墳南側溝との新旧関係は、溝が本遺構を切っており新しい。遺物は弥生土器底部片が出土している。

#### 出土遺物

弥生土器(5) 底径11.3cmの底部片で、ややあげ底気味である。調整は内外面とも磨滅が著しく不明である。色調は淡黄褐色で、胎土は1mm大の砂粒を多く含む。

#### SK9(第10図)

SK2の約2.0m南側、調査区のほぼ中央に位置する土壤である。土層観察のトレーニチにより西側を欠失したが、規模は径0.4m、深さ0.1mで平面形は円形である。断面は台形状で、覆土は黄褐色土である。土壤底面から弥生土器片が出土した。



第11図 SK2(1・2), SK6(3・4), SK7(5)出土遺物実測図(1:3)

## (2) 古墳時代

### 第1号古墳

#### 立地と現状（図版 8 a）

調査区北端、丘陵の最高所からやや南に下る尾根上（標高 247.5 m）に立地する。墳頂部にある主体部とみられる箱形石棺は既に擾乱を受けており、蓋石は抜き取られ、西側小口部が露出しているなど、遺存状況は良好ではない。また、墳丘の西側には僅かに傾斜変換線がみられたが、調査の結果植林による擾乱溝であることが判明した。これは等高線沿いに墳丘の南や東にも廻っていた。

#### 墳丘（第 12・13 図、図版 8 b・9 a・

#### 9 b）

南に延びる丘陵の前後を 2 本の直線的な溝を掘削して墓域を区画する。墳丘の頂部付近には盛土と思われる赤褐色砂質土が認められたが、5~10 cm と薄く、大部分は流失した可能性がある。土層観察によると赤褐色土層下に旧表土の腐植土も認められず、基盤層がある程度水平面を保つことなどから、頂部において旧地形を削平、整形した可能性も考えられる。

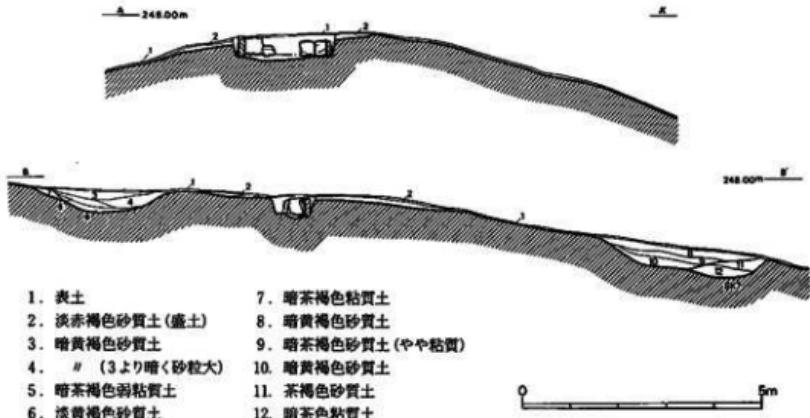
現墳丘の高さは、北側の溝の底面より 0.6 m、南側の溝の底面より約 0.8 m で、規模は溝の幅を墳端とするとき南北 15 m、東西 7 m の不整形な墓域が想定できる。

#### 溝（第 12・13 図、図版 10・11）

尾根線を切断する南北 2 本の直線的な溝を検出した。北側の溝は調査区北端に位置しており、規模は長さ 7.2 m、最大幅 3.5 m、深さ 0.8 m である。断面は U 字形で、溝底面はほぼ平坦であ



第 12 図 第 1 号古墳墳丘実測図 (1:200)



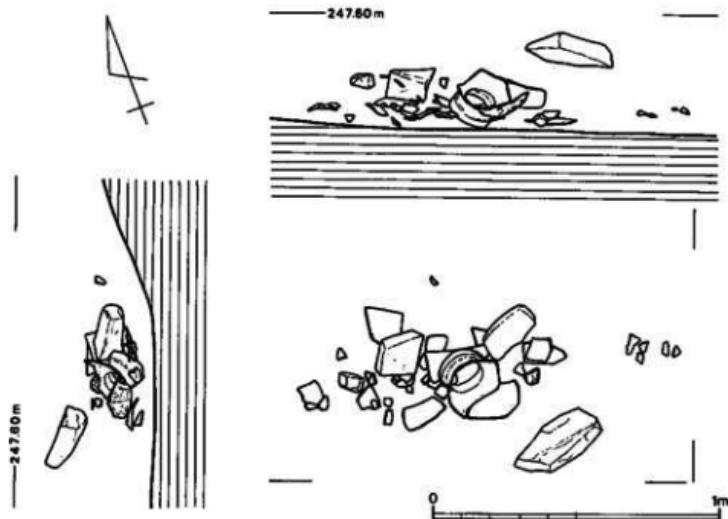
第13図 第1号古墳墳丘断面図 (1:120)

る。溝内には黄褐色砂質土、茶褐色粘質土を基本とする土の堆積がみられた。溝の底面から二重口縁の土師器壺（6）が口縁部を下に、南側から倒れ込んだ状態で出土した。この他、石鎌が溝の東側から出土しているが流れ込みと考えられ、溝に伴うものではない。

南側の溝は北側の溝から約9m南で検出した。規模は長さ7.2m、最大幅3.5m、深さ0.8mである。断面はU字形で、堆積土は上から暗黄褐色砂質土、暗茶褐色砂質土、暗黄褐色砂質土の3層である。SK7との新旧関係は、本遺構がSK7を切っており、新しい。遺物は溝底面より約20cm上部の暗茶褐色砂質土層から弥生土器（壺・台付無頸壺・高杯脚等）が出土しているが流れ込みと考えられる。その他、土師器壺が溝の底面付近から出土した。

#### 出土遺物（第16図、図版14）

弥生土器（8～11） いずれも南側の溝から出土している。8は復元口径11cmの長頸壺で、体部下半を欠損している。頸部はゆるやかに外反し、口縁部は大きく開き端部をやや下方に折り曲げている。口縁部上面には3条の沈線文を、また、頸部には4条の沈線文を施す。調整は内外面とも磨滅が著しく不明であるが、頸部内面には強いナデ調整が残る。色調は淡黄褐色で、胎土は1mm以下の砂粒を含む。9は二重口縁の壺形土器口縁部で、復元口径9.1cmである。口縁部はやや内傾し、「く」字形に立ち上がり、外面には4～6条の波状文が2段に廻る。調整は内面横ナデ、外面は磨滅のため不明である。色調は淡黄褐色で、胎土は細砂を少し含む。10は脚付の無頸壺で、器高20cm、脚台径12cmである。外面には凹線文、凸帶文、棒状浮文を廻らせ、丹彩を施す等装飾性に富んでいる。体部はソ



第14図 第1号古墳北側溝遺物出土状況実測図(1:20)

ロバン玉状に膨らみ、最大径はほぼ中位にある。口縁部はやや内傾しながら立ち上がり、口縁端部は角張る。口縁部外面には6条の凹線文を施した後、その上に2条の棒状浮文を縦に5か所貼り付けている。また、体部中央には3条の貼り付け凸帯文を施す。その凸帯文と凹線文の隙間に3条の棒状浮文を縦に5か所貼り付け、上部の2本の棒状浮文と交互に配置していたと思われる。口縁部下には径3mmの円孔が1か所残る。脚部はゆるやかに外反し、脚端部を上方に拡張する。体部と脚部の境には8条の凹線文を、脚幅部には5条の凹線文が廻る。凹線文間には三角形の透かしを5か所に施している。また、底面には径約4cmの焼成後の穿孔がみられる。調整は、体部内面下半部に横方向のヘラミガキを残す他は、磨滅が著しく不明である。色調は淡黄褐色で、胎土は1mm以下の砂粒を多く含む。外面及び脚部内面に丹彩が一部残る。

11は底径5.2cmの底部片で、あげ底状をなす。調整は内外面ともナデで、外面には一部指頭痕が残る。色調は橙褐色で、胎土は1mm以下の砂粒を多く含む。

14は高杯脚部で、復元脚径は7cmである。脚部はゆるやかに外反し、端部を上下に拡張させている。端部には2~3条の凹線文が廻るほか、脚上部には5条の、裾部には3条の沈線文が廻る。脚中央部には三角形の透かし5か所(復元)を施す。調整は磨滅のため内外面とも不明である。色調は淡黄褐色、胎土は1mm大の砂粒を多く含む。

**土師器（6・13）** 6は北側の溝から、13は南側の溝から出土したものである。6は口径17cm、器高32cmの二重口縁の壺で、ほぼ完形である。底部は丸底で、体部は倒卵形をなし、最大径は体部中央よりやや上部にある。口縁部はやや内湾し、端部は丸くおさめる。調整は、体部外面に細いハケ目を横へ斜め方向に施す。内面の体部下半は縦方向の、肩部には横方向のヘラ削りを施す。頸部から口縁部にかけては内外面ともヨコナデである。色調は淡橙褐色で、胎土は細砂を含む。

13は復元口径15.6cmの甕である。口縁部は内湾氣味に開き、端部は僅かにつまみ上げている。調整は口縁部内外面ともヨコナデ、体部内面はヘラ削りを施す。色調は淡黄褐色で、胎土は1mm大の砂粒をやや含む。

**石鐵（7）** 北側の溝から出土した凹基無茎式の石鐵である。現存長3.0cm、幅1.3cm、厚さ0.5cm、重さ1.97gである。先端部分を欠損しており、裏面中央にやや大きめの素材剥片の剥離面を残す。石材は安山岩質で、色調は灰色である。

#### 埋葬施設

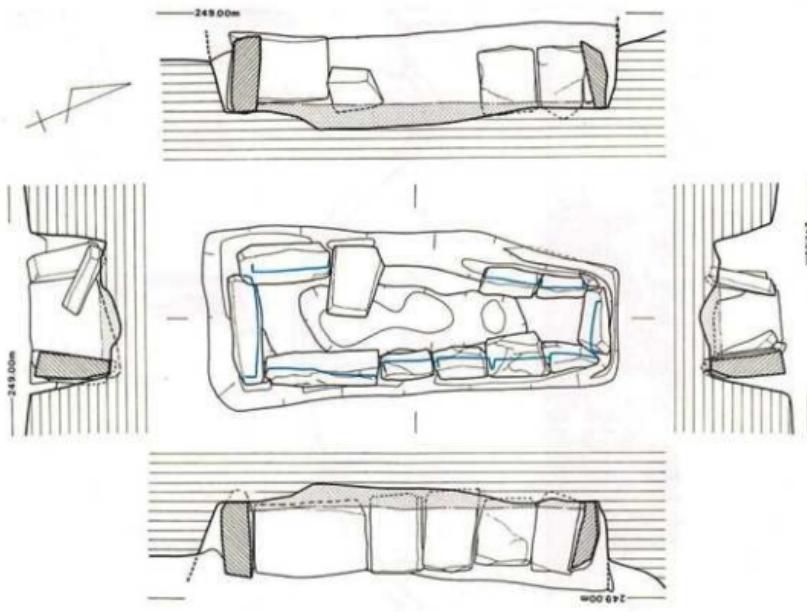
埋葬施設は墳頂部で2基検出した。1基は墳丘のほぼ中央に位置し、中心主体と考えられる箱形石棺で、もう1基はこの東南約1.5mに位置する土壙である。前者を第1主体部、後者を第2主体部とした。

#### 第1主体部（第15図、図版12a・b）

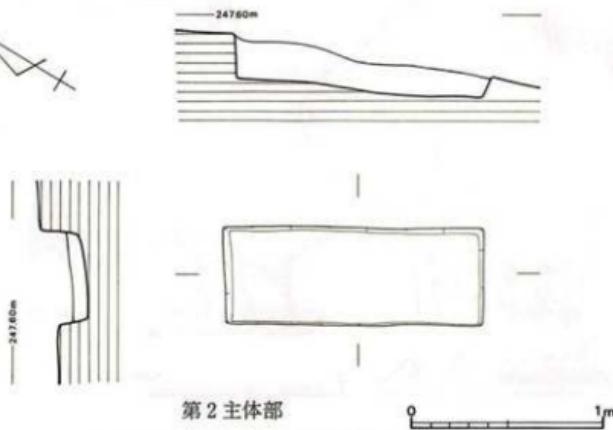
主体部は箱形石棺で、墳丘中央よりやや北寄りで検出した。長軸はN20°Eで、尾根筋と直交する。現状ではすでに攪乱を受けているために蓋石はなく、西側小口部が露出していた。掘り方の規模は長さ2.1m、幅約0.95mで、平面形は長方形である。掘り方は盛土と考えられる暗赤褐色砂質土層をほぼ垂直に掘り込んでおり、現状では深さ0.4m前後である。石棺は西側小口を除いては、厚さ10~15cmのやや厚手の扁平な板石を縦長状に使用している。側石の南側は5枚で構成され、北側は一部抜き取られたため3枚のみ残る。西側小口部の石の組み方は、北側の側石で小口石を固定し、小口石で南側の側石を固定している。また、東側小口部の石の組み方は、両側石で小口石を挟み込んでいる。石棺の内法は、長さ1.7m、幅0.35~0.5m、深さ約0.3mで、西側小口が東側に比べ広いことから、頭位は西側と考えられる。掘り方中央はやや凹むが、茶褐色土を5~10cm敷きつめて棺床面を形成している。遺物は棺内の攪乱土層より弥生土器片（底部）が出土した。

#### 出土遺物（第16図、図版14）

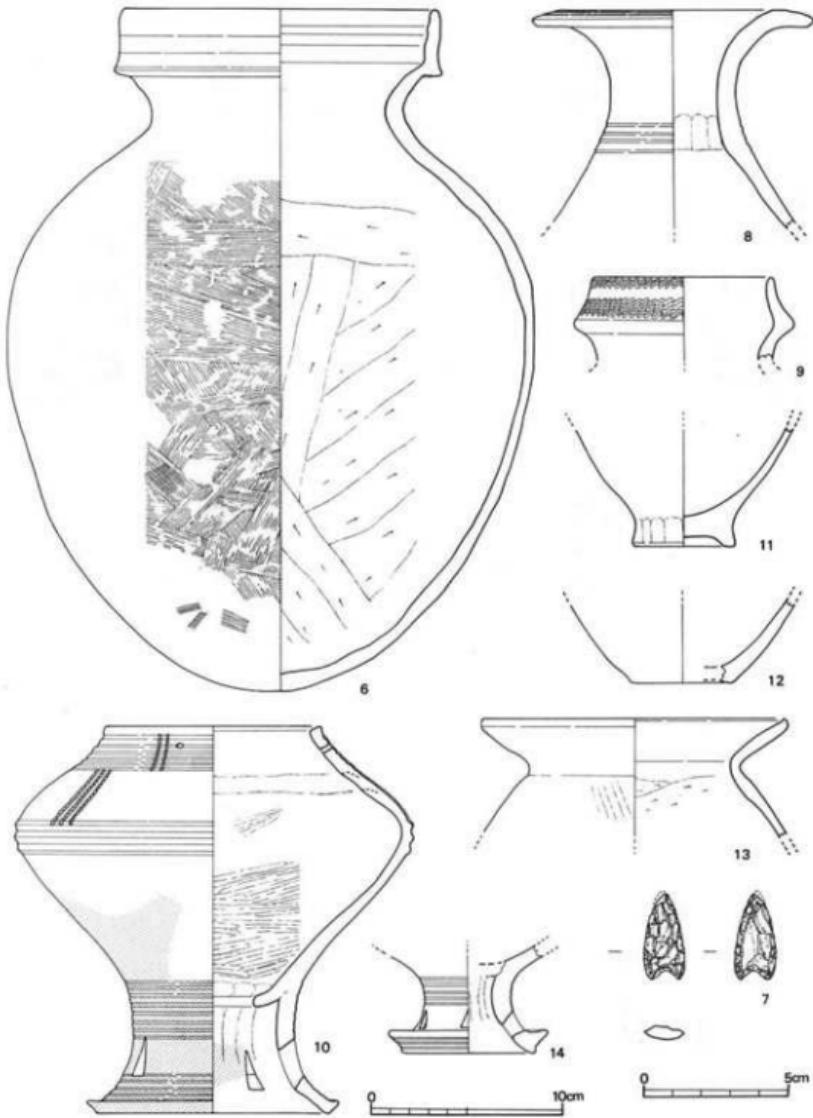
**弥生土器（12）** 底が僅かに凹む底部片で、復元底径5.4cmである。調整は磨滅が著しく不明である。色調は淡黄灰色で、胎土は1mm以下の砂粒を多く含む。



第1主体部



第15図 第1号古墳主体部実測図(1:30)(アミ目は棺床土)



第16図 第1号古墳出土遺物実測図 (1:3, 7は1:2) (アミ目は丹彩)  
北溝 (6・7), 南溝 (8~11・13・14), 第1主体部 (12)

## 第2主体部(第15図、図版13a・b)

第2主体部は素掘りの土壙で、墳丘中央よりやや東寄りで検出した。長軸はN31°Wで尾根筋に平行する。規模は長さ1.3m、幅0.5m、深さ0.3mで、平面形は長方形である。基壙内覆土は茶褐色砂質土で、木棺痕跡は確認できなかった。棺床面は北側から南側に向かって僅かに下がっていることから、頭位は北側と考えられる。墓壙は盛土と思われる暗茶褐色砂質土を掘り込んでいるようにもみられたが明確でなく、他の弥生時代の墓壙のあり方から考えれば、弥生時代の墓壙としての可能性も残されている。

### (3) その他の遺構と遺物

#### SK8(第17図)

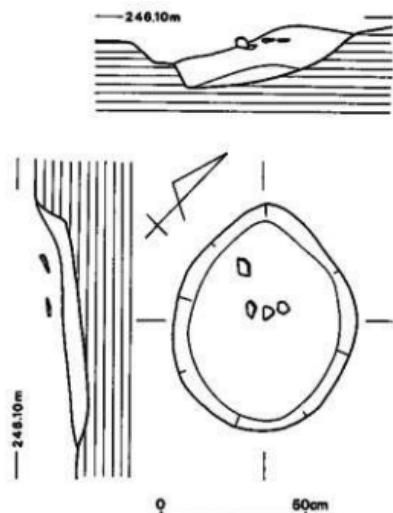
南溝及びSK7の0.5m南側に位置する土壙である。規模は長軸0.75m、短軸0.6m、深さ0.2mで平面形は橢円形である。土壙内覆土は、暗茶褐色土であった。遺物は上層から壺及び壺形土器の肩部片が出土しているが、磨滅のため調整不明である。本遺構の時期・性格とも不明である。

#### 表土出土遺物(第18図、図版14)

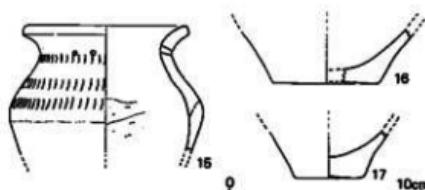
遺構に伴わない遺物で、弥生土器(壺・甕・高杯)、須恵器片(器種不明)があるが、図示し得るものは次の3点である。

弥生土器(15~17) 15は口径8.4cmの壺形土器で、体部下半を欠損する。口縁部はゆるやかに外反し、端部は丸くおさめている。体部はソロバン玉状に張り、頸部には1段の、体部には2段のヘラ状工具による刺突文を廻らす。頸部には径約4mmの円孔2個がある。調整は口縁部ヨコナデ、体部内面はヘラ削り、外面は磨滅のため不明である。色調は淡黄褐色である。

16・17は底部片で、16は底径5.4cm、17は底径3.6cmであり、調整は不明である。



第17図 SK8実測図(1:20)



第18図 表土出土遺物実測図(1:3)

## V. まとめ

今回の調査では、古墳1基のほか弥生時代中期の墳墓6基等を確認することができた。古墳は調査区が限定されていたため、その全容を明らかにすることはできなかったが、以下概略を述べまとめとしたい。

尾根は古墳のある最高所から緩やかに下り、若干の平坦面を形成しながらさらに南へ急傾斜で下っていく。弥生時代の墳墓6基のうち4基はこの平坦面に存在する。この4基の配列を見ると小型の墓壙SK3～5が大型のSK6を取り囲むように位置している。大型のSK6は墓標石を伴っており、木棺痕跡が明瞭に残存する。他の3基からは木棺痕跡は確認できなかったが、墓標石のあり方、墓壙の形態から棺構造は木棺であった可能性が考えられる。従ってこれら4基は、方向性は異なるがまとめて存在する点や墓壙の配列状態及び墓標石を伴う特徴等から、一連のものと思われる。SK6の墓標石下から出土した要形土器は、助平2号遺跡2号住居跡<sup>11</sup>出土のものと類似しており、弥生時代中期後葉に比定できる。以上のことから、これら一群は弥生時代中期後葉のものと考えられる。この他調査区中央部にも墓標石を伴う墓壙(SK2)が存在する。出土した高杯から、弥生時代中期後葉のものであろう。

弥生時代の出土遺物には、この他第1号古墳南溝中層から出土したもの(壺・台付無頬壺・高杯)がある。台付無頬壺は装飾化が著しく、底部には焼成後の穿孔がみられることから日常容器とは考え難く、墳墓に伴う供獻土器の可能性が大きい。第1号古墳の盛土下から遺構は検出されず、また土層観察では旧表土も認められないが、溝内出土の土器の状況は明らかに上方から流れ込んだもので、上方に弥生時代の墳墓の存在が考えられる。第1号古墳第2主体部は不明瞭な点が多く、他の弥生時代の墓壙のあり方から見ると弥生時代の墓壙の可能性も考えられる。

この他、昭和60年度に調査された本遺跡A地区<sup>12</sup>からも、弥生時代中期の墓壙3基が確認されている。このうち2基は尾根頂部に並列し、もう1基はこれより約10m南の緩斜面に供獻土器を伴って存在する。このように横ヶ坪3号遺跡全体では、中期の墓壙が少數単位で散在していることが窺える。このことから、この丘陵は弥生時代中期という限定された時期の、小集団の共同墓地であったといえよう。また、県内でSK6のように墓標石下から供獻土器の出土したものには、吹越2号古墳墳丘下第2号土壤<sup>13</sup>が挙げられる。これは丘陵尾根上に3基の墓壙がほぼ平行に配列している。供獻土器から弥生時代中期に比定されているが、小単位で墓地を構成していることも、本遺跡と共通している。

次に第1号古墳を見てみよう。古墳は横ヶ坪3号遺跡の存在する丘陵尾根の最高所から南へ下る標高247.5m、水田からの比高約30mのところに位置する。この尾根の前後を、長さ7~8m、幅約3.5mの2本の溝でカットし、自然地形を利用して墓域を設定している。墳丘は、僅かな盛土による整地はみられるが、墳裾には地山の掘削等による整地はみられず、明瞭な墳裾を持たない。溝を墳端とすると、東西約7m、南北約15mの不整形な墓域が想定できる。内部主体については、箱形石棺1基と木棺1基で、互いに軸を直交させている。箱形石棺は、厚さ10~15cmのやや厚手の石を縦長状に使用しており、これはA地区の貼石を持つ方墳の主体部と似た様相を示している。箱形石棺は既に攢乱を受けしており、副葬品はみられなかった。

なお、この古墳の築造年代であるが、古墳の北溝から出土した二重口縁の壺に類似したものに、賀茂学園都市開発整備事業地（西高屋地区）内遺跡群淨福寺2号遺跡<sup>10</sup>SS6出土の壺がある。この底部は平底を残し、口縁部が外側にシャープに開く等、本遺跡出土のものよりは古い様相を示している。これは4世紀初頭に位置づけられるようであるが、本遺跡出土のものはこれよりは新しく、4世紀後半代のものと考えられる。

当地域においては、古墳については未調査のものが多く、不明な点が多いが、第1号古墳は当地域の首長墓と考えられている白鳥古墳や仙人塚古墳とは性格は異なるものの、時期的にはこれに先行するものとして位置づけられる。この他、鎌向山第1・2号古墳<sup>11</sup>、木原向山古墳群<sup>12</sup>、賀茂学園都市開発整備事業地（西高屋地区）内遺跡群の胡麻1・5号遺跡及び横ヶ坪3号遺跡<sup>13</sup>の中の古墳等、径10m前後で僅かに盛土を持つ小規模古墳が存在するが、このような古墳が本古墳のものに続いているものと考えられる。また、自然地形を利用し、尾根切り溝を設け墳丘を形成するものには、長迫第1・2号古墳<sup>14</sup>、石鎚権現第9号古墳<sup>15</sup>、須賀谷第1・2号古墳<sup>16</sup>等があり、いずれも4~5世紀代の古墳時代前半期にみられ、いわゆる定形化した墳形を持たないものが、県内各地において存在することが窺え、その共通性が注目される。ともあれ、本古墳は西条盆地における前半期古墳のあり方やその性格を考えるうえで好資料となろう。

A地区を含めて横ヶ坪3号遺跡全体では、弥生時代中期の墳墓、古墳時代前半期の尾根切り古墳、貼り石を持つ方墳、6世紀代の円墳等が確認でき、時代的にも形態的にもバラエティに富んだ遺跡といえる。また、遺構は墳墓しか確認されておらず、丘陵全体が墓地として古くから限定されていた場所であったといえよう。

註

- (1) 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター「助平2号遺跡」「西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅰ)」昭和58(1983)年
- (2) (財)広島県埋蔵文化財調査センター「賀茂学園都市開発整備事業地(西高星地区)内遺跡群Ⅰ」昭和61(1986)年
- (3) 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター「次越古墳群」「石鎚山古墳群」昭和56(1981)年
- (4) (財)広島県埋蔵文化財調査センター「賀茂学園都市開発整備事業地(西高星地区)内遺跡群Ⅱ」昭和62(1987)年
- (5) 広島県教育委員会「越向山第1号・2号古墳」「賀茂カントリークラブゴルフ場内遺跡群発掘調査報告」昭和50(1975)年
- (6) 註(5)と同じ
- (7) 註(2)と同じ
- (8) 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター「長迫遺跡発掘調査報告」昭和57(1982)年
- (9) 広島県教育委員会「石鎚椎現古墳群発掘調査報告(第9・10号古墳)」一宗営農地開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査一 昭和57(1982)年
- (10) (財)広島県埋蔵文化財調査センター「須賀谷古墳群・豊谷東遺跡発掘調査報告書」広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第41集 昭和60(1985)年



a. 遠 景      b. 近 景

図版 2

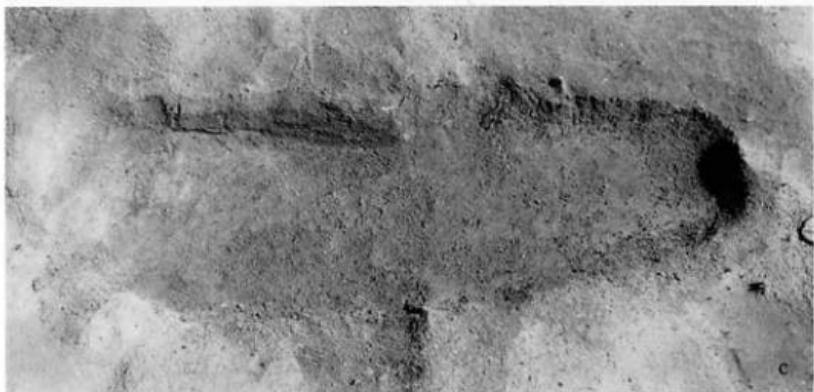


a



b

a. 全 景      b. 作業風景



a. SK1

b. SK2 土層断面

c. 同上掘り方

図版 4



a. SK 3      b. 同上掘り方



a. SK4      b. SK5 検出状況      c. 同上掘り方

図版 6



a. SK 6 検出状況    b. 同上掘り方    c・d. 同上遺物出土状況



a. SK7      b. SK8

図版 8



a. 第1号古墳調査前

b. 同上全景

b



a



b

a・b. 第1号古墳調査後全景

圖版 10



a



b

a・b. 第 1 号古墳北側溝内遺物出土状況

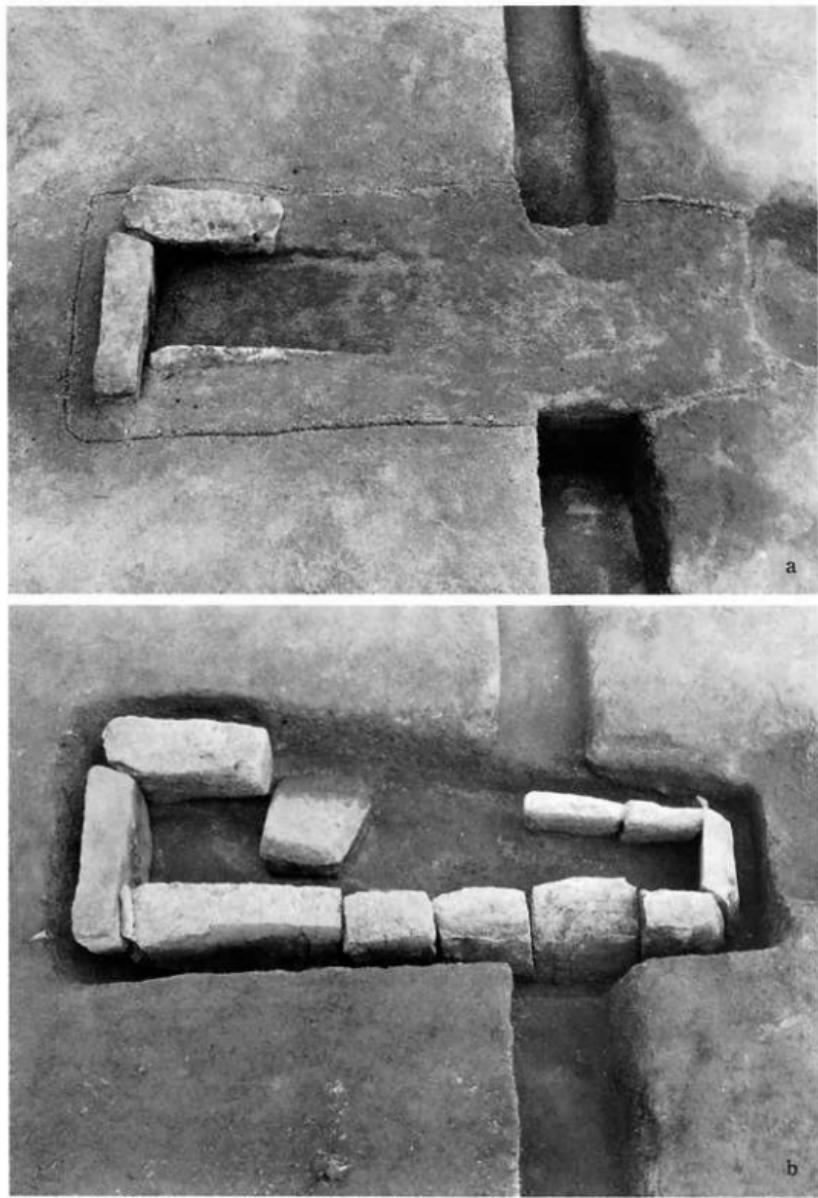


b



a · b · c. 第 1 号古墳南側溝内遺物出土状況

图版 12



a. 第1号古墳第1主体部検出状況 b. 同上完掘状況



a

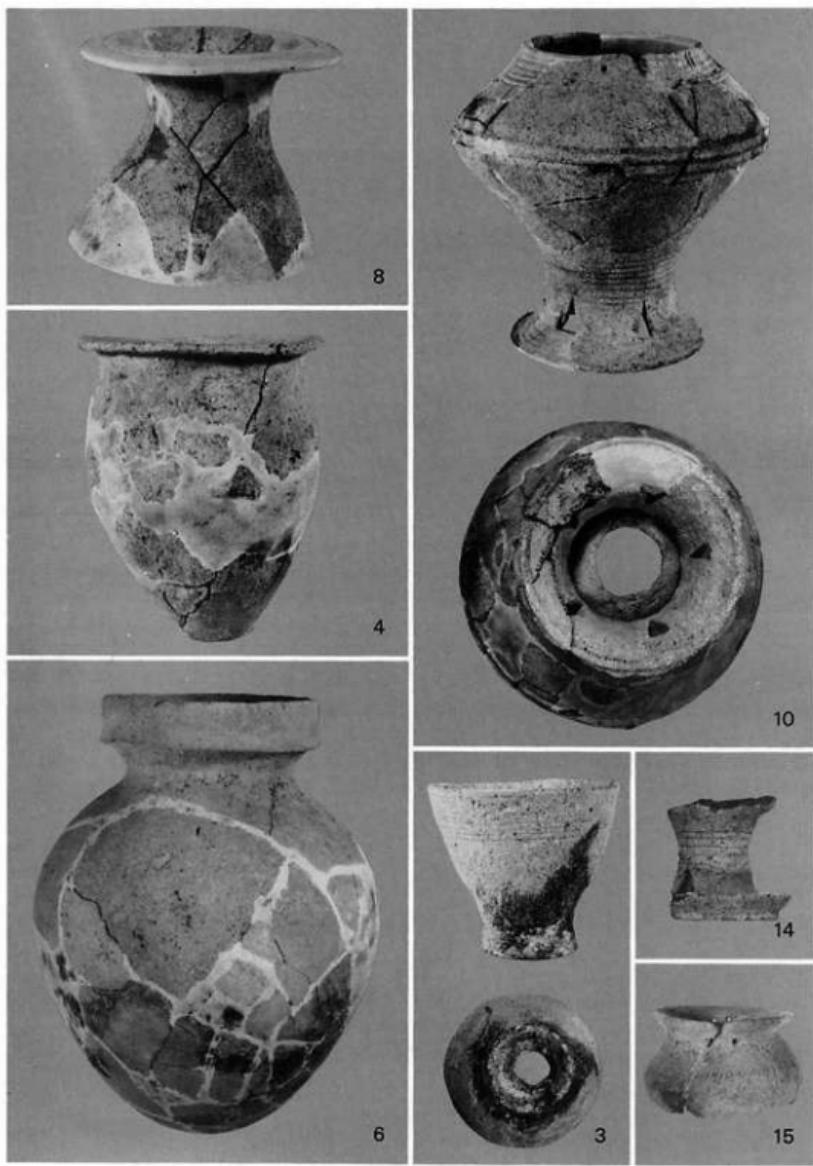


b

a. 第 1 号古墳第 2 主体部土層断面

b. 同上掘り方

図版 14



出土 遺 物

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 第72集

槇ヶ坪3号遺跡(B地区)

発行日 昭和63(1988)年3月

編集・発行

財團法人 広島県埋蔵文化財調査センター

733 広島市西区観音新町4丁目8-49

TEL (082)295-5751

印刷電子印刷株式会社